

映画 樺太 1945 年夏

『氷雪の門』

霞ヶ関の総務省に“いつかは..... 北方四島”の大きな看板が目につく、67年経っても“いつかは.....”のまま、空しく感じる。

樺太も、ソ連領サハリンと呼ばれたままである。

北海道稚内の突端に、二本の塔が失われた樺太を望んで立っている。戦争への怒りと、平和への願いをこめたこの塔は「氷雪の門」と呼ばれる。

映画『氷雪の門』は、この塔と全く同じ願いをこめて作られたもののソ連の圧力にて放映されずに閉ざされていたもので幻の名作と言われている。

この映画はソ連の侵攻作戦の真只中、最後まで通信連絡をとり、若い生命を投げうった真岡郵便局電話交換手九人の乙女の悲劇を描いた真実の物語である。(提供：本会メンバー「森 基氏」)

どなたでもいつでも歓迎の千葉木鶏クラブです。

皆様のお越しをお待ちしています。

記

1. 日 時 : 平成 24 年 5 月 26 (土)
PM 13 時 30 分 ~ 16 時 00 分
2. 場 所 : 北辰文化倶楽部 ☎0474-25-0220
<交通案内> JR 東船橋駅 徒歩 5 分
駐車場有り
3. 会 費 : 1000 円
4. 映 画 樺太 1945 年夏 『氷雪の門』
5. 物 語



1945 年の夏、太平洋戦争終末を迎える中、戦禍を浴びない樺太は緊張の中にも平和な日々が続いていた。だが、ソ連が突如として参戦、日本への進撃を開始。ソ連軍は戦車を先頭に怒濤の如く南下。罹災者たちは長蛇の列をなして、西海岸の真岡の町をめざして逃げた。

八月十五日、全く突然に終戦の報がもたらされた。敗戦国の婦女子がたどる暗い運命、生きられるかも知れないという希望、さまざまな思いが交錯する中で、樺太全土に婦女子の疎開命令が出た。一人、また一人と交換手たちも引き上げていく。しかし、ソ連の侵攻はやまなかった。むしろ激しさを加え、殺りくを重ねた。戦争はもう終わったのではないのか？人々は驚愕し、混乱した。

それは八月二十日、霧の深い早朝であった。突如、ソ連艦隊が現われ、真岡の町に艦砲射撃により町は紅蓮の焰に包まれ、戦場と化した。この時、『第 1 班の交換嬢たち九人は局にいた。緊急を告げる電話の回線、避難経路の指示、多くの人々の生命を守るため、彼女たちは職場を離れなかった。局の窓から迫るソ連兵の姿が見えた。路上の親子が銃火を浴びた。もはや、これまでだった。班長はたった一本残った回線に「皆さん、これが最後です。さようなら、さようなら」と叫ぶと静かにプラグを引き抜いた。